

連続講演会「災害と教育・福祉」を開催して

橋本 明

昨年の9月から11月にかけて、生涯発達研究所主催の3回にわたる連続講演会「災害と教育・福祉」が行われた。本号の特集はこのときの講演録を編集したものである。毎回の講演開始の直前に繰り返し述べたことだが、昨今の日本にとって「災害」はきわめてアクチュアルなテーマであるとともに、時代や地域をこえた普遍的な関心事でもある。さまざまな分野で活躍しておられる方々を講師としてお招きし、「災害」をテーマにして教育と福祉の観点から議論を深めていこう、というのが連続講演会開催の趣旨だった。

と、述べると、あたかも最初から周到に練られたプログラムだったかのように思われるだろうが、実際は少し違う。早くから「災害」というテーマと、講演会という形式は漠然と考えられてはいたものの、「連続」というアイディアはなかった。講師選びの段階で、是非お話を伺いたいという候補者が次々に浮上してきた。講演依頼の話が突然舞い込んできた講師および仲介の労をとっていただいた方々には、それこそ「災難」だったかもしれない。結局、幾多の連絡と調整を経て、1回の講演会や1回のシンポジウムにまとめることとせず、秋季に3回に分けて、それぞれの講演にじっくり時間をとって会を開催する方向で決着したのであった。本号の記事は、各講演の内容と会場の雰囲気をよく伝えているのではなかろうか。

いまから振り返ると、多種多様な人たちを巻き込む形で作り上げられてきた3回の講演会には、多種多様な聴衆を迎えることができ、このようなありかた自体が、人材や社会資源の活用と有機的な連携を視野に入れている生涯発達研究所の設置・運営理念になっていたと評価できるかもしれない。次年度も、生涯発達研究所としてあるテーマを設定して、講演会やシンポジウムといったイベントを開催できたらと考えている。引き続き関係者のご協力をお願いしたい。

蛇足だが、災害といえば、たまたま1回目の連続講演会の2日後に台湾に出かけ、台

風の直撃を受けた。呑気に朝から資料収集のために出歩いていたら、あっという間に暴風雨に巻き込まれた。地下鉄もバスも止まり、なんとか拾ったタクシーで台北郊外のホテルへ戻ったが、その日は缶詰め状態だった。食料買い出しのために、ホテルの目の前にあるコンビニに行くのもかなり命がけなのである。地元の人たちには慣れたことのようにだったが、事情がよくわからない外国人の自分としては不安な時間を過ごした。翌朝、街のあちこちで大木が文字どおり根こそぎなぎ倒されていた。よく見れば、大木の根が意外に浅い。だから暴風雨に耐えられなかったのだろうが、亜熱帯の植物たちの生存戦略には自然災害への備えはプログラムされていないのか、と不思議に思った。